

八重山のカツオ漁を巡る生業ネットワーク： 波照間島のカツオ漁と黒島のザコ捕りを中心 に

古谷野, 洋子

(出版者 / Publisher)

法政大学沖縄文化研究所

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

沖縄文化研究

(巻 / Volume)

37

(開始ページ / Start Page)

167

(終了ページ / End Page)

213

(発行年 / Year)

2011-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007284>

八重山のカツオ漁を巡る生業ネットワーク

—波照間島のカツオ漁と黒島のザコ捕りを中心に—

古谷野 洋子

本論の目的

八重山におけるカツオ漁は戦前から戦後の一時期まで、八重山水産業の中心をなし、カツオ節製造は地域経済に大きく寄与していた〔石垣市史編集委員会 一九九四 六四四〕。波照間島でも大正時代から昭和三〇年代までカツオ漁が盛んに行われていた。カツオ漁の盛んな頃の波照間島の船舶所有数は石垣市字新川について多かった。

カツオ漁は毎日のエサの確保が必要だった。昭和二〇〜三〇年代、カツオ漁の時期になると黒島の人々は地の利を生かしてザコ（雑魚）捕りの仕事を請け負っていた。契約仕事である。夜の明けない

うちから海に潜ってザコを捕り、籠に入れて海中に浮かしておく。早朝、波照間島のカツオ船はそのザコを載せてカツオ漁に出かけた。両島の生業暦が似ていたため、この関係は波照間島のカツオ漁が衰退するまで続いた。

本論は、波照間島のカツオ漁と黒島のザコ捕りを通して、昭和二〇～三〇年代の八重山のカツオ漁をめぐる生業ネットワークについて考察するものである。貨幣経済下の八重山の島々の生業が、それぞれの島の特徴のもとに、海と島々のネットワークの中でどのように展開してきたかをみていきたい。

1. はじめに：海と島々のネットワーク

八重山諸島は石垣島・竹富島・黒島・新城島（上島・下島）・西表島・鳩間島・波照間島・与那国島などの有人島からなる。これらの島々は、生活のためのさまざまなネットワークで繋がっていた。⁽¹⁾

小林茂は「一五世紀後半の琉球列島南部の土地利用と景観―『李朝実録』所載の漂流記録の分析から―」（『農耕・景観・災害―琉球列島の環境史―』収録：二〇〇三年）において、八重山の「高い島」と「低い島」のネットワークについて論じた。「高い島」とは西表島・石垣島・小浜島であり、山があり、水があるので稲作は可能だがマラリアの有病地でもある。「低い島」とは竹富島・黒島・新城島・波照間島・鳩間島などであり、隆起珊瑚礁で形成された山も川もない島であり、水が不足するので稲作

はできず粟作である。「高い島」は稲作が主で、森林が多く、開発は全島に及びにくく、「低い島」では、畑作が主で、森林は少なく、開発は早くから全島に進んでいるので、材木のような生活資源や、米のような食料が島内で自給できない「低い島」では、「高い島」からの供給に仰がなければならなかったと小林は指摘している。

得能壽美は『近世八重山の民衆生活史―石西礁湖をめぐる海と島々のネットワーク』（二〇〇七年：以下、『近世八重山の民衆生活史』とのみ記す）の中で、島嶼社会における島々・村々のネットワークのありようを歴史的に検討した。石西礁湖せきさいしょうことは石垣島と西表島の間広がるサンゴ礁の海域である。この海域は前述したふたつの比較的大きな島（石垣島・西表島）とその間（周辺）のいくつかの小さな島々からなる。得能は、石西礁湖を中心とし、この海を介する島々のネットワークが、総体としての八重山を形成していたと述べ、それは島々それぞれの個性があつて、はじめてなりたつものであつたという。

得能は、単なる島を越えた、あるいは村を越えた通耕作だけでなく、山林（材木）、水などの問題も含めた多様な側面を持った関係を「海と島々のネットワーク」と称した。「島嶼という自然条件は他との簡単な同一化を許さずに、島々の個性を形作っているのだが、それらの島々は閉鎖的でも孤立的でもなく、開放された社会であつたということの歴史的な確認を試みた」〔得能 二〇〇七 五〕という。アジア史や世界史レベルでの交流ではなく、生活レベルの間断ない他島との交流がなければ、

かつて今も未来も、島は生きていくことはできないと述べ、人頭税の時代から、既に問題解決のために海や村落を超えたネットワークが石西礁湖には作り上げられていたと指摘している。

安溪遊地は「橋をかける―島々の交流をめぐって」(『西表島の農耕文化 海上の道の再発見』収録：二〇〇七年)のなかで、「高い島と低い島の交流」という視点から、八重山の島々における現金をもたない交易活動の調査を行い、詳細な記録を残そうと試みた。安溪は聞き取りによって、西表島西部(主に祖納・干立)と米の取れない黒島の人々の間には稲束と灰、あるいは稲束・白米と麦・豆・海藻の物物交換が行われていたこと、鳩間島と西表島西部では海産物(主にカツオの頭やアーサ(海草))と米の物物交換が行われていたことなどを報告した。「高い島」の稲束と「低い島」の特産物が交易されたのである。しかも、単なる物物交換ではなくて、西表島の稲束は貨幣―限定目的貨幣として扱うことができたという指摘をしている。

得能は人頭税時代、安溪は昭和初期の八重山を扱っていた。本論は、主に昭和二〇～三〇年代のカツオ漁がまだ盛んな頃の八重山の生業ネットワークについて扱うものである。貨幣経済の中で、八重山の生業ネットワークがどのように機能していたかについて、当時の波照間島と黒島の生業の実態から記すものである。

前述したが、従来は主に「高い島」と「低い島」のネットワークが論じられてきた。しかし、実際には、様々な条件が関与して問題解決のためのネットワークが作り上げられてきたのである。波照間

島も黒島も「低い島」である。本論では「低い島」同士のネットワークを扱い、島嶼におけるネットワークの「中心となる島」（石垣島）との位置関係に注目した。^③波照間島は石西礁湖の島々の中では最も遠方に位置する。現在では石垣港まで高速船で約一時間だが、大正時代は島づたいに一週間もかけて小舟で渡ったという（宮良 一九七二 一一）。しかし、実は遠いという位置的状况も八重山のネットワークという視点で見れば一つの特徴と考えられる。なぜ、波照間島でカツオ漁が盛んだったのかと波照間島の勝連文雄氏（大正六年生まれ）にお聞きしたとき、氏は次のような答をした。

まあ、島が……。島の連中はね、竹富とか、小浜とか、黒島とかは石垣に近いでしょ。だから石垣に行つてもうけもできるでしょ。金がなければクリ舟で石垣に行つて、石垣で日雇いとく、金をもらつてそういうふうにして、帰つてきて農業。農業つてのは時期だよ。だから時期、時期は農業やつて、あつちはあつちの特徴があるわけ。こつちは遠いところだから、石垣にもうけに行つたりきたりできないね。親もいらつしやる、子供もおる。家もすてていけない。

本稿は「中心となる島」から遠い、近いという島の位置的状况も島々のネットワークの中の条件とみなし、このような条件下で、「中心となる島」から「遠い島」である波照間島と「近い島」である黒島が、貨幣経済下の八重山でどのようなネットワークを築いていたかの記録と考察である。

最後に用語の統一について記す。鯉、カツオはカツオと、鯉漁業、カツオ漁業、カツオ漁等はカツオ漁と、雑魚、ジャコ、ザコ等はザコと、餌、エサはエサと、引用文等をのぞいて統一して記す。八重山諸島は基本的には八重山と統一して記す。文中の石垣とは、石垣島のことを指す場合もあるが、同島の中心である四カ字しかあせ（特に字新川）を指す場合もあるので、文脈によって判断していただきたい。資料によつては旧仮名遣いのものであるが、原則として新仮名遣いに統一して記す。八重山では集落を部落と呼ぶ習慣があるので、文脈によつては本稿でもそれに従う。新聞の引用は『竹富町史 第一巻 資料編 新聞集成』（I・IV）によるが、煩雑を避けるため新聞の発行年月日のみ記し、引用ページ等は省略する。

2. 波照間島のカツオ漁の歴史

八重山、および波照間島のカツオ漁はどのようにして始められたのか、波照間島のカツオ漁にはどのような特徴がみられるのかについてみていきたい。

(1) 八重山のカツオ漁の歴史

八重山のカツオ漁については、『石垣市史 各論編 民俗上』（以下、『石垣市史』とのみ記す）の

「第三章 第五節 水産業」(六〇一～六五六)、通事孝作「波照間島のカツオ漁」(『情報やいま』二〇〇三年五月号収録)などに記されている。また、『沖縄県農林水産行政史』の第八・九巻(水産業編)及び第一七巻(水産業資料編)、『竹富町史 第一一巻 資料編 新聞集成』、『宮古八重山郡漁業調査書』⁽⁴⁾などに、報告・記録等がみられる。

以下、主に『石垣市史』に拠る。八重山におけるカツオ漁は、その資金力や技術などの点から、沖縄本島の糸満や本部、あるいは宮崎県や鹿児島県出身者たちによって始められ、それが次第に地元に着したものであり、明治中期頃に糸満から出稼ぎに來た專業漁民の定住によって、本格的な歩みをみせたという⁽⁵⁾。八重山が外からの專業漁民を引きつけた理由としては、商品価値の高かった海人草などの海藻類や夜光貝などの貝類が豊富に採集できたこと、明治一五年(一八八二)に石垣に古賀商店という販路ができたことが挙げられる。

八重山のカツオ漁の中心地は石垣島四力字の字新川であった。そして、そのエサとなるザコ捕りを目的とした網漁業もさかんに行われるようになった。ザコを捕る漁はジャコトウエー(雑魚捕り)と呼ばれ、ザコを捕る漁師はジャコトオヤーと呼ばれた。明治四四年～四五年(一九一一～一九一二)にかけては、エサ捕り(ザコ捕り)漁場の確保などを主な目的に、八重山各地で漁業組合が設立されていた。これらの組合は、大正一一年(一九二二)に、石垣島漁業組合、竹富漁業組合、与那国漁業組合に統合され、八重山郡水産会が設立され、同会を窓口として国や県からの補助事業が導

入ざれていった。

カツオ漁のエサの問題についてはすでに大正時代から報じられていて、「琉球新報」に掲載された「本県の鰹漁業」（大正元 八・一八）、「八重山漁況」（大正六 八・二七）、「餌捕獲の急務」（大正六 一〇・二四）、「八重山の鰹漁」（大正七 五・一七）などの記事にみることができる。

筆者の聞き書きでも、大正時代にはカツオ漁は八重山の多くの島々で行われていたことがわかる。戦後はカツオ漁のためのエサのザコ捕りを行っていた黒島でも、一時期、カツオ漁が行われていた。黒島の宮良当成氏（昭和一〇年生まれ）は、「あの頃は船も小さいし、島の周囲でもカツオが釣れたんじゃないかね。近海で、大正の頃でしょうね」というが、大正時代は近海で小さな船でカツオ漁ができた時代だった。⁷⁾ 黒島では今でもその頃のカツオ節製造に使用した釜が残っているという。しかし、しだいに近海でカツオを捕り尽したため、台湾沖などの遠方まで出かけるなければならなくなっていった。遠方まで行くのを選んだのは、石垣島や波照間島の人々だった。⁸⁾ 黒島は波照間島のザコ捕り、ジャコートオーヤーとなった。

『宮古八重山郡漁業調査書』によると、大正二年（一九一三）の八重山における漁船は二〇艘であり、そのうち「字波照間ヲ根拠トナセルカツオ漁船数」は帆船一艘であった（二〇九）。ところが、昭和三年（一九三八）のカツオ漁船数は、波照間七艘、石垣一〇艘、小浜一艘、鳩間四艘、与那国大型五艘、小型曳縄船一六艘の合計四三艘であった（石垣市史編集委員会 一九九四年 六五〇）。昭和

二九年（一九五四）六月三〇日の「八重山毎日」によると、波照間七、与那国五、石垣一〇、鳩間四の計二六艘である。このように、昭和に入ると波照間島のカツオ漁船所有数は常に上位を占めていたことがわかる。

では、どのようにしてカツオ漁船を買うことができたのだろうか。勝連氏によると、石垣には枕崎、宮崎、鹿児島あたりのカツオ漁に経験のある商人の間屋があつて、契約によつてカツオ漁の資金を提供していたという。勝連氏はその仕組を次のように語る。

あの当時はね個人の力はないから、石垣の間屋が資金をもつておつて、ああいう連中がこつちがカツオ漁するというと、あんたたちに資金を提供する、あんたたちの釣つたカツオは私が販売すると、契約するんだよ。こつちは金がないでしょ。あつちはちゃあんと船を作らせて持つてきている。私なんか最初乗つた船は宮崎の船であつた。宮崎からわざわざこつちへ持つて来たわけ。（その船は借りるの、買うの？）買うさ。いちおう買うさ。しかし、現金では買わん。カツオを捕つて品物を親方に納めると、親方が処理して、後で決算をする。だから金なくてもできたつていうわけ。多く釣れたら資金を出した人も儲かりますよ。二重儲けか三重儲けかわからない。儲けの半分は親方がとる、半分は配当さ。こつちは資金もなんにもないんだから、親方の金でもつてやつて、両方得になるわけさ。

勝連氏の話からは、カツオ船は、石垣の間屋から、釣ったカツオの儲けによる後払いという契約で購入していたことがわかる。さらに大正時代には、漁業資金の低利貸付が制度化され、漁船の建造改良に大きく寄与したという〔沖縄県農林水産行政史編集委員会 一九九〇 一一〇〕。波照間島ではカツオ漁の興隆に伴って、自分たちで石垣島の造船所に船を注文するようになった。⁽¹⁰⁾ 石垣島はカツオ漁に関する情報・資本・資材・流通システムを有するカツオ漁ネットワークの中心であった。

以下、『石垣市史』による。敗戦後、本土から来ていたカツオ漁者は本土へ引き上げることになり、このため沖縄本島から来ている残留漁業者や地元漁業者によってカツオ漁、およびカツオ節製造が、字新川や波照間島、与那国島で継続された。戦後の八重山のカツオ漁の最盛期は昭和三〇年代（一九五五〜一九六四）であり、三三艘ものカツオ漁船が操業していたが、昭和五八年（一九八三）頃を境に廃業していった〔石垣市史編集委員会 一九九四 六五〇〜六五一〕。

化学調味料などでだしをとる時代になったことが廃業の最も大きな理由であったが、直接の原因は他にもいくつかあった。廃業の原因については後述する。

（２）波照間島のカツオ漁の歴史

波照間島のカツオ漁の歴史については、宮良高弘『波照間島民俗誌』や加屋本正一『波照間島』、通事孝作「波照間島のカツオ漁」などに記されている。また、住谷一彦・J. クライナー『パティロ

「一マ（一）」でも言及されている。波照間島のカツオ漁についての聞き書きは、野原全勝「波照間島の漁業」〔波照間島調査報告書 地域研究シリーズNo.3〕収録）、高村ゼミナール『竹富町波照間島研究報告書―島民ライフヒストリー集とアンケート調査―』に掲載されている。¹¹⁾

宮良によると、波照間島には糸満漁民は居住しておらず、島民自らが漁業に従事している点や專業化していない点に特徴があるという。しかも漁獲物はカツオ節を除いては商品化されることはなく、カツオ漁は歴史の浅い産業であったが、製糖工場導入以前までの唯一の商品産業であったという〔宮良一九七二 四二～四四〕。

以下、宮良による。明治の頃から糸満船はこの島まで訪れた。波照間島の近海は旧暦三月の初旬ごろが飛魚の季節なので、その時期になると糸満船はこの島を訪れ、海岸辺に仮小屋を作り、寝泊りしながら魚を捕り、それを塩漬けにして持ち帰っていた。波照間の人々はそのおり彼らから漁業の手ほどきを受けた。明治四三年頃（一九一〇）になると、糸満漁民は帆船でやってきて、島の人七名を二年間雇ってカツオを捕り始めた。その間に、島民たちは自分たちだけでカツオ漁ができる見通しを得た。その頃、与那国島ではすでにカツオ漁が盛んだったので、かれらは与那国島に見習いにいき、大正元年（一九一二）に石垣島で帆船を建造させたのが波照間島におけるカツオ漁のはじめであった。当時、大飢饉によって税金を払う金もなかったため、与那国島から帰った人々がもたらした現金は島民の生活に潤いを与えた。このことが島民のカツオ漁に目覚める直接的なきっかけとなった〔宮良

一九七二 四四〇四五」。

勝連氏によると、波照間島のカツオ漁の始まりは次のようである。与那国島の後、波照間島に赴任してきた外間区長が、「与那国ではカツオを釣つて金になつてゐる。波照間の周囲はカツオがいっぱいいるから与那国の真似をしないか」と若者たちに勧めて、与那国に見習いに行かせたという。与那国島に行つた若者たちはカツオ釣りとかツオ節製造について学んできた。勝連氏によると、カツオ漁の従事者は漁労部・機械部・製造部に分かれ、漁労部はカツオとそのエサのザコを釣り、製造部はカツオ節製造、機械部は船の機械操作を担当するが、これら全てを学ばなければならなかつたのである。

以下、宮良による。大正時代、各部落では次々と帆船を建造した。大正九年（一九二〇）には帆船を発動機船に切り替えた。糸満漁民はその頃から来なくなつた。外部落ほかと北部落は一緒に組合を作り、小浜島の細崎くぼさきに納屋を建てて、カツオ節を三年間製造した。南部落・名石部落・前部落も一緒に組合を作り、石垣島の字新川に建てた納屋で五年間カツオ節の製造を行つた。サンゴ礁だらけの波照間島の海岸に発動機船を寄港させる技術がなかつたからである。その後、発動機船が寄港できるようになると、納屋も波照間島に移転しカツオ節の製造を行うようになった。昭和三年（一九二八）頃にはカツオ漁は部落単位に再組織され、組合を作るようになった〔宮良 一九七二 四四五〕。

部落民の共同出資、共同作業という島特異の形態は、他の注目を浴びた〔野原 一九八二 六〇〕。組合員は株を持ち、株を持つものだけがカツオ船に乗れた。株を持っていても男手のいない時は親戚

内に乗る人を調達した。勝連氏は一時期、男手のなくなった叔母（伯母）の家の持つている株のカツオ船で働いたことがあるという。乗組員を出さないと配当をもらえなかったからだ。株は親から子へと引き継がれた。ある男性（昭和一二年生まれ）は、親の株があったので学校を卒業してすぐにカツオ船に乗ったという。波照間島のカツオ漁は部落共同体によつて維持されていたといえよう。

波照間島にカツオ漁は急速に広まった。生産は本格化し、農業に影響を与えるようになると、キビの夏植えを遅らせるなどの工夫がなされ、夏のカツオ漁、冬の農業という半農半漁の形態を定着させた〔野原 一九八二 六〇〕。「一番儲かるのはこのカツオ漁だから、どれだけ人夫をひきつけたかな、カツオ船は」と勝連氏はカツオ漁の魅力を語る。大高安昇氏（大正一五年生まれ）も学校を卒業し、早速カツオ船に乗った。「別に怖いことなかった。エンジンで、昔みたく帆船じゃなかったさ。責任者から頼まれて毎日毎日だよ。夜とか昼とか関係ない。エサが終わったら帰ってくる。一ヶ月も二ヶ月もさ」という。

波照間島では戦前・戦後とカツオ漁が盛んに行われた。カツオ船の所有数も常に七艘を下らなかった。通事によると、島でカツオ漁が盛んに行われたのは一九二八年（昭和三）から一九六一年（昭和三七）までの三三年間であり、戦時中に一時中断したが、戦後まもなく復活し、一九五三年から一九五五年（昭和二八〜昭和三〇）ごろに最盛期を迎えたという。その後、やや衰退したが、それでも一九六一年（昭和三七）ごろには部落単位の共同漁船四隻と個人所有船二隻が操業していたという。大

嵩氏によると波照間島では戦後すぐにカツオ漁が再開されたというが、それは疎開先の西表島はえみ南風見から人々が生還し、島民の人口の三分の一を奪ったマラリアが沈静化した頃のことと考えられる。⁽¹³⁾

では、いつ頃まで波照間島ではカツオ漁をしていたのだろうか。双眼鏡手（眼鏡手）であった大嵩氏は波照間島のカツオ漁の終焉について次のように語った。

あとはもうほうぼういなくなってしまったさ。自然消滅。波照間ではできないから、石垣の方でカツオ船乗ってあんなして生活してきた。こつちでは経費もたんからね。こつちでは、漁のあるときはあつたけど、ないときはないでしょ。エサ取りはちゃんとした。小浜、黒島あたりではちゃんとエサ取っていたでしょ。経費がもたないわけよ。黒島からエサ積んで海に出るからエサ代もかかる。今じゃカツオ船が潰れてキビだけになつてるさ。

波照間島のカツオ漁が自然消滅したあと大嵩氏は石垣のカツオ船に乗った。波照間島のカツオの漁獲高ではエサ取りの経費が出せなくなったからだという。波照間島のカツオ漁の自然消滅については野原が現地における聞き取り調査を行っているが、その主な理由としては①若者の流出がはげしく、必要な労働力の動員が困難になった、②漁港の不備により台風時にサンゴ礁に船舶がたたきつけられ、損傷がひどいためその年は使用不能となる、③冷凍設備が皆無であり、処理加工の時間的調整が不可

能なため、省力化が困難である、④エサ代の値上がり、⑤石油代の値上がり、⑥一般物価の値上がり
とカツオ節価格との不釣り合い、⑦カツオ節代用品の出まわり、を挙げている〔野原 一九八二 六三二〕。
カツオ漁が自然消滅した後、波照間島はサトウキビ栽培一色の島になって現在に至る。¹⁴⁾

3. 波照間島のカツオ漁の実際

波照間島は石西礁湖の島々のうちで石垣島から最も遠方に位置し、有人島としては日本最南端の島である。隆起サンゴ礁によって形成された「低い島」であり、周囲一四・八キロメートル、最高標高五九・五メートルの平坦な島である。同島は外・名石・前・南・北の五つの集落によって成り立っている。ここでは、戦前戦後を通してカツオ漁に従事した勝連氏と大嵩氏、鯉節製造に携わった崎山千代氏（大正七年生まれ）の語りから波照間島のカツオ漁について記す。

(1) カツオ漁とカツオ節製造

勝連氏と大嵩氏によるとカツオ漁は次のように行われた。船は早朝四時頃には出発、日の出の頃、小浜島の前の海を通る。太陽の明かりで自分たちの船のザコの籠を探して、ザコを入れてすぐ漁場に行く。ザコは契約した黒島のザコ捕り専門の人々によって、毎朝、海上に籠に入れて用意されていた。

「人はいなくて籠だけが浮いている。浅いからアンカーつけて置いてある」(大嵩氏) というが、カツオ船は海上のザコをとり、黒島・小浜の間を通って大海にでた。「大海に出ないとカツオに会わない」(勝連氏) からだという。

乗組員は、船長、機関長、双眼鏡手、餌撒きに分かれていた。カツオ船は朝が早い。船にのつたら双眼鏡手以外は寝るだけだった。食事は船の中で米を炊いて食べた。勝連氏によると「私らなんかあつちのお米でカツオなんかを釣りおつたよ」という。その米は「モチメもない、カサカサして、あれは食べられん」と氏はいう。氏は、ヤマトマイ(ヤマトメー)、シツマイ(スツメー)、ビヅルメー、ポーザマイ、蓬萊米六一〇号などの米を栽培していたが、その中でポーザマイはモチメがないので主に酒の原料とされていた(古谷野 二〇一〇 一八三)。しかし、カツオ船ではモチメのない米をわざわざ石垣から購入して食べていた。なぜならば、「カツオ船はすべて買ってきてやるんだから。油も買ってくる。石炭も買ってくる。薪も買ってくる。お米も食料もみんな買ってきてやる。石垣あたりの業者から」(勝連氏) だという。石垣の間屋との契約の中には、カツオ漁にかかる機材や消耗品はすべてその問屋から購入するという契約があつたのであろう。

「西表の高い山が見えなくなるまで南へ行った」(勝連氏) というが、漁場はその時々で違ったという。台湾ゾネとか、ナカゾネなどと呼ばれるゾネでカツオは釣れた。勝連氏によるとゾネとは、大海で潮流が渦を巻くところであり、浅いところなのでプランクトンの成長が早く、ザコが集まっている

ので、カツオが寄ってくるという。台湾ゾネの場合は潮流が西に流れているときだったら大体四時間かかった。これを四時間バイといった。逆に潮流が流れているときだったら五時間もかかった。カツオを釣って船に満載して帰ってきたという。

双眼鏡手だった大嵩氏によると、カツオの群れのいるところには何十羽という鳥がヤマを作って盛り上がっているという。これをトリヤマといい、望遠鏡でトリヤマを探してカツオの群れを見つける。勝連氏によるとカツオの一本釣りは次のように行われた。

双眼鏡は海鳥をみてカツオを探すのさ。海鳥が案内してくれるんだ。カツオがエサを下から上に上げるんです。だからエサはカツオが恐ろしいもんだから、海面に上がってくるわけ。エサは海面でジャブジャブ、上からは鳥が来て下から上げてくれるエサを食べる。下からはカツオが食べる。人間は鳥を見て、ああこつちにカツオがおるといって、船を向けて一本釣り。

トリヤマが発見されると、船は全速力でトリヤマに近づいた。以下は『石垣市史』による。本撒きは鳥の飛び方をよく見て、エサを撒いた。カツオが船に寄ってくると、さらに船の三カ所からエサを撒いた。カツオが船に近づくと、機関長は直ちに散水をして、カツオを元氣付け、食いつきをよくさせた。最初はシャビキ（擬餌針）を使用してどんどん釣り上げ、食いつきが衰えると活きエサをハリ

に付けて釣った〔石垣市史編集委員会 一九九四 六五一〕。

以下、勝連氏による。カツオを見つけると一時間で満載した。釣ったらすぐ島に帰る。釣って八時間以内には島に戻らなければならなかった。八時間以上たったら魚が傷んでしまうからだ。島に着くまでは漁師はみんな寝ていたという。

では波照間島では何人くらいの人々がカツオ漁に従事していたのだろうか。勝連氏によると、「船の大きさにもよるが、波照間の船はひとつの船に二五名くらい乗った。大きい船が三〇名くらい」という。二五名乗りでも七艘が稼動していたとすれば、毎日一七〇人以上の男たちがカツオ船に乗っていたことになる。

しかし、カツオ漁は釣るだけではない、さらにカツオ節製造という過程があった。カツオ漁は釣った魚をそのまま売ったわけではなく、現地で加工してカツオ節にしてから流通に乗せた。このような加工工程があったからこそ、冷蔵・冷凍設備の完備していない時代、本土から遠く離れた亜熱帯の八重山でもカツオ漁が盛んに行われたのだ。

船が帰ってくると浜では製造人が待ち構えていた。無線がなかった時代には漁獲量の合図は旗で行われた。一番漁の少ないときは日の丸、多くて順に赤旗、三色、五色があったという。大量の場合には人手がいるからである。製造人と呼ばれる人々がカツオ節製造の役割を担っていた。「カツオ工場は浜端にあるんで、製造人が見ている。製造人が目が回るくらい忙しかったら人雇わんといけないさ」

「年寄りでも引退した人でも大漁のときは頼んできて、骨を抜くとかね、背皮を抜くとか」（勝連氏）、
 「漁師はカツオ下ろしたらお家に帰る。手不足であつたら工場におつて手伝うこともあるさ」「大漁して手が回らるときは人夫も雇つてやってきた。ほとんど男さ」（大高氏）というように、忙しいときの働き手の補充の制度もあつたことがわかる。漁師と製造人という役割分担はあつたが、大漁のときは漁師も手伝わなければならないほどの忙しさだつた。

船を待ちかまえていたのは製造人だけではなかつた。若い女性たちもいた。「一八の頃かね、一九の頃かね、若い女は浜で船の帰つて来るの待つさ。みんなで集まつてからよ、海に向かつて、太陽に向かつて、船が来たら、船が来たよーつて。船が見えたらよ、旗でわかるさね。大漁だねーと思つたらセイロ二人で持つてよ、お父さんなんかカツオの頭切つてよ、姉さんなんかはみんなであれに入れて運んで」と崎山氏は語る。戦前からカツオ製造は若い女性にとつては現金収入が入る貴重な働き口だつた。

カツオ製造に関しては、組（後述する）が国の補助として低利資金を借りることができた。⁽¹⁵⁾ この資金も何年かかけてカツオ漁の儲けから返すことができたと言連氏はいふ。「南西新報」（昭和二八・八・五）からは、漁港施設についても地方庁経済局から補助金が出たことがわかる。

「こつちはめいめいの工場をもつていた。めいめい水揚げするからな」（大高氏）というように、カツオ節工場は各船ごとにあつた。ひとつの船にひとつの工場だつた。船着場と工場は直結していた。

勝連氏によると、今の製糖工場の脇には、朝日丸、豊福丸、大豊丸、大福丸が泊まり、四つのカツオ節工場があり、西には二艘、そして今の栈橋の上には初福丸、東大福丸をはじめとする五艘が泊まり、それぞれカツオ節工場があったという。最盛期の頃のことであろう。

話者の言葉にもあったように、まず、浜の上でカツオの頭を切った。女性たちがセイロに入れてカツオを工場に運んだ。当時の波照間には各地から人々がやってきていた。勝連氏によると、中にはカツオ節製造に係わっていたのであろう、糸満の女性もいたという。カツオは浜で頭を切って、ワタを取り、茹でてから乾燥する。乾燥は男性が行った。だが、乾燥に移る前に、骨を皆抜いて傷のあるところを綺麗に直すという作業があった。

カツオは毎日六時間くらい乾燥させ、約一四〜一五日燻製して棚から下ろした。煙で真っ黒になったカツオ節を削るのは女性の仕事だった。⁽¹⁶⁾カツオ節製造は乾燥させるために膨大な量の薪を使う。大嵩氏は、「薪は「ヤママー」を呼んで相談して西表から取ってくる。取った木は自分の船で運んでくるよ」という。「ヤママー」とは山の木を手配するヤマシのことであろう。勝連氏によると、昔は西表島の木を伐採して、山から下に落とし、小伝馬船に乗せて本船まで持ってきて、本船で運んできたという。大嵩氏は「(木を切る人は) 向こうの人がおる」というが、西表島には木を切る専門の人がいたようだ。「波照間はカツオ釣るくらい薪があるか。薪どこから持ってくる。みんなキバタケだよ。あんた、カツオってのはこんな大きいのを乾燥するんだよ。大きい木でカツオを乾燥する。何時間も何時間も」

(勝連氏)、この言葉からいかに多くの薪がカツオ節製造に必要なものかが想像できる。¹⁷⁾

カツオはカツオ節以外にも様々に利用された。カツオの頭は塩漬けにして保存しておき、それだけでしをとった。だが、大漁のときにはそのような余裕はなかった。“大漁して手が回らんとき”は、カツオの頭はみんな捨てたという。「そんな余裕ない。あれは鶏の餌とか、豚の餌さ」(勝連氏)という状態だった。大漁のときのカツオ節製造がいかに忙しかつたかがわかる。商品となったカツオ節は、「東京とか、名古屋とか、大阪、神戸とかあたりにダーツといった」(勝連氏)という。¹⁸⁾

(2) カツオ漁の時期

このように人手の要るカツオ漁とカツオ節生産の期間はどのくらいだったのだろうか。波照間島の生業暦の中でカツオ漁はどのような時期に行われていたのか。勝連氏によると、春漁、夏漁、秋漁とあり、春漁はいちおう採算は取れる、夏漁が一番大漁でものすごく儲かったという。「波照間は半農半漁。時期、時期さ」という大高氏は、「製糖工場もあるし、冬は製糖、夏はカツオ船。そうよ、田んぼもやって雨が降ると水を溜めて牛、馬が踏んで。蚕もやって糸とって」という。「八重山毎日」(昭和二九・五・一一)掲載の「話題の島波照間を訪う(下)」には、「五月から鯉出漁期に入って九月までの間は働ける男子は皆海に出るため、農耕はすべて女子の手で営まれる」と記されているので、カツオ漁は五月から一〇月近くまで行われていたと考えていいだろう。同記事には、波照間の女性は働

き者であると記されているが、“農耕はすべて女子の手で営まれる”は誇張であろう。では、具体的にどのようなカツオ漁と農業を両立させていたのだろうか。

波照間島は山も川もない島ではあるが稲作ができた。同島の土壌にあった踏耕という稲作技術があったためである。昭和三五年の統計では、水田は畑地の二分の一弱の割合だった（加屋本 一九七七 七二）。しかし、一般の家では主食は粟・麦・イモであり、米は特別の日にしか食べられなかった。

波照間島の農業については拙稿「波照間島の農耕文化―昭和三〇年代までの農業を中心に―」（『比較民俗研究 二四』収録）で報告したので詳細は省きその概要を記す。波照間島は他の沖縄の島々と同じく台風を避けるため冬に耕起して、播種する冬作だった。粟も米も刈り入れまでの時期が長かった。その理由のひとつは天候に左右される農業のため、リスクを考えてさまざまな種類の米や粟を作っていたからである。その年の雨量によつて、米も粟も種類を、早稲、晩生と変えていたため、粟の播種や田植えの時期は長く、年によつても異なった。農業の従事期間は長く、手が空くのは粟と米の刈入れがすべて済んだ七月から九月までだった。勝連氏は、「収穫終わつてカツオ漁さ。大体、こつちのお米の収穫は五月、六月だから、七・八・九月は夏漁」というが、最も大漁する夏のカツオ漁の時期が波照間島の農業で最も手のあく時期だったことがわかる。また、サトウキビの栽培が始まると、一月から四月までは、キビの刈取り作業があった。カツオ漁は波照間島の生業暦にほぼ合っていたのである。

また、そのための調整も行われた。前述したが、キビの夏植えの時期を出来るだけ遅らせて、その労働力をカツオ漁（カツオ節生産を含む）にあてたという。カツオ漁の組合が主に部落単位で構成されていたので、統制力があつたため出来たことである。「だから家族の多い人はお米も作る、砂糖も作るし、カツオ漁もするし」（勝連氏）という状況だった。

（3）波照間島の経済とカツオ漁

農業と両立したカツオ漁は島の経済に潤いを与えた。実際、カツオ漁によつて島の経済はどのようになつていったのだろうか。

大正六年生まれの勝連氏が子供の頃、波照間島は自給自足の島だった。学用品やソーメン、石油、サンピンチャなどを売る店があつたが、お金ではなくて鶏の卵でバターで手に入れたという。つまり、商品は卵との物物交換だった。粟酒も卵で買った。崎山千代氏は、鶏を放し飼いにし飼ひ、卵と粟酒を交換したという。卵は五個ずつ藁に包んで、真ん中を縛つてくくり、五個入りを二〇個作り、一〇〇個にまとめたものを商人が石垣に売りに行つた。藁でくくつた鶏卵が貨幣の役割をはたしていたのである。

しかし、自給自足の島は急速に現金収入の入る島になつた。カツオ漁と燐鉱である。昭和初期、波照間島では日本燐鉱株式会社と朝日肥料株式会社が操業していた。採掘事業は昭和一三年（一九三

八) 頃最盛期を迎え、昭和一六年(一九四一)まで大々的に継続された(加屋本 一九七七 九三〇。労賃は一日一円だったが、ダイナマイト使用者になった勝連氏は一円五〇銭だったという。娘時代、崎山氏は燐鉱でも働いて家計を助けていた。金額は別として、昭和初期の波照間島は若い女性が働いて現金収入を得られる島になっていた。波照間島の人は「燐鉱もカツオ船も自由に選べる」(勝連氏)という状況だった。「燐鉱行きたい人は燐鉱。あれは確実性のものだから。カツオ漁っていうのは時期があるわけさ。春漁、夏漁、秋漁と、忙しい人は夏漁だけさ」と勝連氏というが、人によってあるいはその家の事情によってどちらかを選んだのであろう。

波照間島では燐鉱労働者の宿泊施設としての収入も入った。「波照間はふたつの会社の民宿さ。家を借りて鉱夫を入れておった。鉱夫は何百人もいた。福岡から来たもの、三池炭鉱とか、沖繩本島や宮古、多良間、石垣の人がいた。台湾人までもいた。各家みんな民宿」(勝連氏)という状態だった。カツオ船に乗っていた勝連氏が熊本の本隊に入隊したときは、「お金をたくさん持っていったからよ。軍隊でよ、あんた商売にきたかと叱られた」という。勝連氏の入隊は昭和一二年(一九三七)頃のことであろう。カツオ漁と燐鉱会社は自給自足の時代から、島を急速に貨幣経済の島に変えた。しかも、経済的に豊かな島に。経済的に島が豊かになるということは、資本を必要とするカツオ漁にも他の島々と比べて取り組みやすいという効果があったと考えられる。

実際、カツオ漁による収入はどうだったのだろうか。「波照間の人はカツオ釣るのが楽しみで、あ

れでまた金を多くもらえるんだ」と勝連氏はいう。カツオ漁の時期が終わると親睦会があり、その時期の収益に応じて配当があった。「儲けがあればあったさ。個人個人の働きをみて、みんな配当金があったさ。(金額が)みんながみんな同じだったらもたないよ」と大嵩氏はいう。「カツオは金になったよ。八〇〇円の配当したことあった。あのときの一日の労賃はたった一円ですよ」と勝連氏は言う。この金額は戦前のもっともよかった時期の配当だと思われるが、それにしても一日一円の時代に(一日一円の労賃とは隣鉱会社の労賃のことであろう)、多分四〜五ヶ月だったと考えられるが、労賃が八〇〇円とは高額である。

そして、戦後の食糧難を支えたのもカツオ漁だった。昭和二六年二月二日の「南琉タイムス」によると、同年の食糧危機では、カツオ漁による収益金で石垣市場、大浜から甘藷を購入して飢えをしのいでいたという。

では、カツオ漁による儲けはどのように使われたのだろうか。大嵩氏によると、カツオ船の儲けで、瓦葺の家を作り、税金を払い、子供を学校に出したという。子供の教育費の問題は大きかった。⁽¹⁹⁾昭和三〇年代は子供たちを高校に入れる時代になっていた。八重山では高校は石垣島にしかなかった。現在の五〇〜六〇代の人は、「よく親が自分たちを高校まで出してくれた」と話すが、子供たちの教育費の捻出にもカツオ漁は貢献した。

サトウキビ栽培が波照間島で本格的に行われるようになったのは、昭和二八年(一九五三)頃から

である。同年三月二十五日の「八重山毎日」には、「孤島波照間に製糖熱 特等級の黒糖ばかり」という見出しで、「鯉王国といわれた絶海の波照間に黒糖熱が興っているが、初めの試みとして製糖農連に搬入したところ何れも特等級の折り紙をつけられ、生産者を喜ばしている」という記事が掲載されている。

4. 黒島のザコ捕り

黒島は、周囲一二・七キロメートル、最高標高はわずか一三メートルというサンゴ礁が隆起してできた平坦な島である。島は、宮里みやざと・仲本なかつもと・東筋あがりすじ・保里ほり・伊古いこの集落からなる。黒島の主な産業は農業であったが、保里・伊古の両集落では漁業が行われていた。昭和三〇年代、保里部落の人々は波照間島や石垣島のカツオ船と契約してザコ捕りに従事していた。

なお、伊古部落は糸満漁民によって作られた集落である。しかし、宮良氏によると、「あそこ（伊古集落を指す…筆者）ももとのからのウミンチュではある。だけどザコ捕りはあそこの人はあまりやらなかった」と語る。当時、ウミンチュである伊古の人々はザコ捕り以外の漁に従事していたのである。両集落は、ザコ捕りとザコ捕り以外の漁と住み分けしていたのかもしれない。伊古集落の成立とジャコトウイヤーの関係は不明であり、ご存知の方がいらしたらご教示願いたい。

(1) 黒島の農業

現在の黒島は三〇〇頭もの牛を有し、墓地までが牧場の中にあるというほどの畜産の島である。竹富町で唯一の牛のセリ市場もこの島にあり、コンピューターによる最新の設備が整っている。しかし、本格的な牧畜はここ三〇年くらいのことだという。昔は島全体が畑で、粟、イモ、ゴマ、大豆などを作っていたという。また琉球王国時代、黒島の人々は西表島に通って田んぼを作っていた。通耕である。しかし、米で人頭税を納めていたわけではない。黒島では人頭税は粟で納めていた。⁽²⁰⁾

では、黒島では農業はどのように行われていたのだろうか。以下は前述の保里部落の宮良氏、仲本部落の宮良哲行氏（昭和二十二年生まれ）、東筋部落の船道憲範氏（昭和八年生まれ）からお聞きした黒島の農業である。

黒島は河川が無く、土質は雨水が浸透しやすく、波照間島と同じように水に苦勞した島である。かつては薄い表土に雑穀とイモを栽培していた。稲作はできない。畑作は連作障害があるので一年間休ませたり、粟を作ってから豆、それからゴマを植えたりイモを植えたり、じゅんぐり、じゅんぐりだったという。肥料は草を腐らしたり、焼いたりして肥料とした。「時期を間違えると食べるものがない」といわれ、連作障害と時期を考慮しながらの畑作だった。粟の収穫前にイモや豆を植えたり、先を考えての農業だった。粟はバラマキで草取りは二回くらいした。粟は七月に収穫するが、揃

って稔らないので、垂れた穂だけを切り取った。イラナーというカマの小さいので切り取ったので労力がかかった。粟の収穫が終わると豊年祭になる。⁽²¹⁾ 青豆も豊年祭前までに収穫し、豊年祭にはそれではんざいを作って振舞った。粟の後にゴマを蒔き、一〇月くらいに収穫する。ゴマは堅い殻に入っているので台風が来ても心配ない。大豆は五月に作付けし、八月に収穫した。豆の収穫が終わったらそのあとにもイモを植えた。イモは主食で、夕方になるとこの家からもイモを石の器で洗う音が聞えてきたという。⁽²²⁾ サトウキビ、玉ねぎなどの換金作物栽培も行われたが、最終的には採算が取れなかったという。

黒島の中でも保里部落の農地は少なく、人々は半農半漁の生活だった。海人草採りや高瀬貝を採る船に乗り込んだり、農業の手の空く夏の三〜四ヶ月間はザコ捕りをした。保里部落の人がザコ捕りに従事したのは、彼らがウミンチュであったこと、ザコ捕りが保里部落の農業暦に合っていたこと、島の周囲にザコのス(ヤナ)のあるリーフがあったことによる。

(2) 黒島の人々のカセギ

表土の浅い小さな島では農業の生産量にも限りがあった。そのため黒島の人々はさまざまなカセギをして生計をたてていた。まず、物物交換によるカセギがあった。粟を作って米との物物交換はよく行われた。⁽²³⁾ 船道氏によると他島との物物交換は個人レベルで行っていたという。ゴマがたくさんでき

たときはゴマ油を作り、個人で小浜島に行つて米と交換してきた。ゴマ油を一〇斗缶くらい持つていけば一〇俵くらいの粉俵になつたという。²⁴⁾

特に黒島の粟酒は物物交換に用いられた。「粟酒はお米と交換した。西表にも行くし、小浜にも行くし、白保あたりにも知り合いがおるなら、また白保あたりの人と交換して。一斗甕に入れて酒をもつていけば米が貰える、現金ではなくて物物交換よ。基準があつたんじゃない」と船道氏という。黒島では各家で粟酒を作つていた。家で粟をふかして麩を被せ、麴を混ぜ、酒屋でカマを借りて蒸留した。カマ賃はできた粟酒で払つた。できた粟酒は水を溜める大きい甕に入れた。だが、多く蓄えておくという余裕はなかつたという。「生活が苦しいからすぐに売りに行くんですよ。作つた人がめいめいで、運搬船がありますからよ。あれは闇だからね、税関におさえられるんだから。隠れて売りにいったはずよ、夜の二時頃売りさばきをやつたんじゃない」と宮良氏は言う。粟酒は単なる物物交換ではなかつた。闇酒である。昭和二年七月一四日の「海南時報」によると、黒島酒は同年（一九四七）七月一二日付けで島外移出禁止となつている。²⁵⁾ 宮良氏も「粟酒は戦後、あれがひとつの金に変えるあれではあつたよ。そうとう何年か、十何年か、盛んにやつておつた時代があつたよ」という。宮良氏によると粟酒の密売は昭和二十七年（一九五二）頃まで行われていたという。しかし、これは戦後の特殊なカセギといえよう。

男性には海でのカセギがあつた。明治時代から行われていた夜光貝や高瀬貝などの貝捕りと海人草

捕り、そしてカツオのエサとなるザコ捕りである。

海人草はナツサラーという虫下しに使われる薬草である。宮良氏によると、「海人草切りに行くよーって募集するからね。何一〇名の乗組員を、潜りの人を募集して船団組んでいくわけさ」という。保里部落の人はもちろんのこと、東筋部落などからもいったと聞く。宮良氏によると、宮古地方からやってきた人もいて、船は島々の人々の寄り集まりだったという。

以下、海人草捕りもやったという宮良氏による。台湾からずつと南のホルクツという小さな島を中心に海人草捕りの作業は行われた。本船はサバニを三艘伴つていく。本船には船長以下、副船長、会計、機関長などの幹部と乾燥役を合わせて七、八名は乗っていた。また、三艘のサバニには責任者がいて、これにそれぞれ五人くらいの潜りの人がいた。合計で三〇人近い人だった。潜る人は毎日のように朝早く起きて、弁当を持って日暮れまで海人草を採る。陸では乾燥する人が海人草を太陽に干してカラにして袋詰めにした。夕方、捕った海人草を陸に降ろし、乾いた海人草を母船に詰める。約五〇日すると船が満船になるので石垣に引き上げた。海人草捕りは前金制だったが、儲けはその人の実力によって異なつた。⁽²⁶⁾

高瀬貝はボタンを作る貝である。貝捕りのほうが海人草より儲けはよかつたという。子供やきょうだいの教育費を稼ぐため保里部落の人ばかりでなく東筋部落の人も貝捕りに雇われていった。海人草を捕る海と高瀬貝を捕る海は異なる。石垣島から船を出してフィリピンやインドネシアまで大きい船

が小さい船を引いていった。大きい船は浅瀬に行けないため、小さい船が一ヶ月、二ヶ月とかけて貝を捕った。海人草捕りと貝捕りは一年中あったので、年に何回も行く人がいた。仕事はきつく食糧事情も悪く脚気になった人もいたが、いい儲けだったので黒島では一〇回くらい行った人もいたという。海のカセギ以外にもさまざまなカセギがあった。宮良氏は二〇歳の頃、由布島に住んでいた黒島の人の田んぼで、一日に籾の何升という手間で、刈取りや収穫の加勢をしに行ったことあるという。タビカセギといって、八重山からさらに遠くはなれた与那国や那覇にカセギに行くこともあった。終戦直後の与那国や那覇は景気がよかったため、黒島では女性たちもこれらの島々にタビカセギに出た。しかし上述したこれらのカセギは不安定なものであり、収入も一定していなかった。その点、島において農業をしながらできるザコ捕りの仕事は毎年一定の現金収入をもたらした。

(3) 黒島のザコ捕り

明治四三年(一九一〇)八月二〇日の「沖繩毎日」には、「四ヶ村を以つて根拠地とし四、五海里乃至一二、三海里の沿岸に於て盛んに営業し餌料たる雑魚は附近に住所を有する糸満人と契約して此の供給を仰ぎたる」という記述がある。当時は四ヶ字付近に住居する糸満人によつてザコ捕りが行われていたことがわかる。勝連氏も、「ああ、糸満人が責任者してた。頼めばよ、教育しない子供、沖繩のヤンバルの子供買つてきて、自分がエサ取りに使うわけよ」という。糸満系漁民の漁は泳ぎや潜

りの達者な若い労働力が必要とされ、そのため少年を年季奉公で買う制度があった。イチマンウイ(糸満売り)である。⁽²⁷⁾しかし、この制度はアメリカ統治下の琉球政府によって禁止され、昭和三年(一九五六)には法的処置がとられるようになった〔石垣市史編集委員会 一九九四 六三八〕。

では、ザコにはどのような種類の魚があつたのだろうか。以下、『宮古八重山郡漁業調査書』(一一三―一一四)による。大正二年(一九一三)、八重山では、グルクン、アカジャコ、ハタラ、キビジャコ、シイラ(シイラグア)、ガツン、スルルなどがカツオ漁のエサとなるザコであつた。この資料には黒島沿岸で捕獲されるザコについての記述はないが、隣りの島である小浜島を根拠としたカツオ船は、⁽²⁸⁾五月にシイラ、六月にアカジャコとガツン、七月にグルクンを餌料としていたという。ガツン及びキビナゴは餌魚として最も適しているが、ガツンが少いのが遺憾であると記されている。

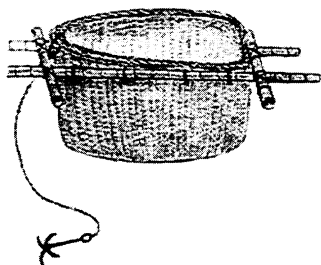
ザコ捕りは網を持って潜って行って被せておき、被せた上にザコが集まったら潜って網を引き上げる。「糸満人じゃないとできない。石垣の人はできないよ」と勝連氏というが、「黒島の人はやった」。黒島の人でザコ捕りの大将なんかもおつた。ふたりくらい、親方になった人で金儲けした人もおつた」という。勝連氏によると、黒島の人は糸満の人からやり方を教えられてザコ捕りを覚えたという。⁽²⁹⁾黒島では主に保里部落の人々が波照間のザコ捕りを引き受けていた。保里部落の宮良氏は、「あの頃はいい儲けだったよ」と何回も繰り返して語る。確かに黒島の人々にとってはいい収入になったが、このザコの費用の捻出も波照間島のカツオ漁の衰退の一因となった。

ザコの捕れる場所は一般にヤナといった。『石垣市史』によると、主なヤナは、石垣島と竹富島の間、名蔵沖、川平沖、小浜島沖、黒島沖、御願崎沖、屋良部崎沖であった。勝連氏によると、小浜島の前や黒島や新城の近く、また小浜島の東の方と竹富島との間にリーフがあり、これらのリーフの中にはザコが集まったという。保里・伊古の両部落は小浜島・竹富島・石垣島側の海岸沿いにある。つまり、両部落はザコの集まるヤナに面していたわけである。³⁰⁾

『石垣市史』によるとザコ捕りは次のように行われた。漁の前日に目の細かいモジアミをジャコヤナ(ザコのス・筆者)に被せておく。ザコは夜になると餌を求めて外に行き、夜明けとともにジャコヤナに戻ってくるので、それを見計らっていつきに網を引き揚げる(『石垣市史編集委員会 一九九四 六二七』)。宮良氏は二〇歳のときから五〜六年間、ザコ捕りに従事していた。昭和三〇年から三六年頃(一九五五〜一九六一)までのことである。ここでは、宮良氏の語りを中心に保里部落のザコ捕りについてみていきたい。ザコ捕りは三〇メートルも潜る大変きつい仕事だったという。海辺で育った保里部落の人は潜りが上手だったが、他の部落の人にはこの仕事はできなかつたと氏はいう。³¹⁾ザコ捕りは夜明け前には出発した。「頼まれていたからね。波照間の船は夜中から出発して、夜が明ける頃にはもうエサ籠に着いているんだから」という。氏によるとザコ捕りは次のように行われた。

船でたぐる人が二人、海にもぐる人が二人、いろいろな網を引き上げる人が二人で、六〜七名でできるんですよ。サバニは一艘で七名くらい載って、あんなでつかい籠をふたつも載せて、そうとう力のあるサバニでないといけない。小さいものじゃできないんです。あの頃は裸もぐりですからね。息を吸い込んで二〜三分もずーつといて、網をはずしたりして、珊瑚にかかる網をはずさんと網が破れてエサ捕れませんかね。網というのは、一ヶ所、毛布よりちよつと大きいぐらいの一部分ね、細かい網を付けとくんですよ。ザコが洩れないように細かい網があるわけさ。網を引き上げて、細かいところに寄せて、網のまま持つてきて、こう籠を傾けてからね、ちよつとのつかかつて、沈ましてからこれを移すんです。これを何回もやってフタカゴとか捕ったら家に帰ってくるんだけど、捕れない場合もあつたりしてよ、大変難儀の仕事でもあつたよ。

捕つたザコは竹で作つた籠に入れた。籠を浮かして生簀にしておくと、朝早く、波照間島のカツオ船が来てザコを詰め込んで沖に出発した。氏はザコ捕りの仕事を「大変難儀の仕事でもあつたよ」というが、「人に頼まれていい儲けをしてるんだからね」ともいう。ザコ捕りが黒島の人にとってはよい収入であつたことがわ



明治大正時代のエサ入れの絵
太田正議氏画・八重山博物館蔵

かる。「捕れなかった場合には、もう仕方ないから捕れるまで波照間の船に待つてもらおう」こともあったという。「大事業だから迷惑をかけてならないもんだから、エサ捕りの責任者はがんばらんとならんわけさ」と宮良氏は語る。この言葉にはザコ捕りがカツオ漁という事業における契約仕事であったという自覚と責任感が表れている。

以下、宮良氏による。ザコ取りのグループは保里部落では四団体くらいあった。それぞれ責任者が決まっていて、石垣や波照間島のカツオ船と契約をしていた。普通、カツオ漁は新暦の五〜九月以内だったが、石垣は六ヶ月間もやっていた。波照間島は三ヶ月半から四ヶ月くらいだった。「あそこもまた半農半漁だから。はやく引き上げたんでしような。石垣は本業だから秋カツオが釣れるまで半年もやる人もおりましたよ」という。

ザコ捕りの契約はどのように行われたのだろうか。宮良氏によると、ザコが毎日一定量捕れなければカツオ漁は行えない。ザコのいるス(ヤナのこと)は点々としかないので、責任者というのはどこにザコのスがあるのかを熟知していなければならなかった。カツオ漁の船主は信用のできる人を責任者として頼んだという。「誰々はできそうな人だと波照間島でも石垣でも聞いていますからね」と宮良氏はいふ。石垣には八重山のカツオ漁に関するさまざまな情報が集まっていたのである。「月に何百万といつて契約した。月三〇〇万で引き受けますかって、契約するんだ」と宮良氏は語る。ザコ捕りの契約の値段は実力によって異なった。いいヤナを巡ってはザコトオーヤーの大將たちが石垣に

集まりくじ引きで決めたという話はしばしば聞く。昭和三〇年四月一七日の「八重山新報」によると、「昨日は各船の餌取り責任者で餌穴の抽選を行い」という記事があり、同記事によると穴は一番穴から三番穴まであったことがわかる。また、同記事には、「鯉漁の大漁不漁は餌の出来、不出来と関係があり、餌の出来、不出来は餌取りの努力にもよるが、餌穴の良、不良によることが多いとのことである。而も石垣島、西表島近海に於ける、餌穴は古くから知られて居り、其の良、不良も番付されているとのことである」と記されている。

黒島の人々はザコ捕りに必要な資材も石垣から買い求めた。網も、網に塗る動物の血も石垣の業者から買い入れた。昔の網は木綿網だったため、水分を含まないように定期的に豚や牛の血で染めていた。³²⁾ 石垣では豚や牛の血を腐らしたものを一斗缶に詰めて売っていたという。

5. まとめとして：波照間島と黒島のカツオ漁ネットワークの考察

ここでは、主に昭和二〇～三〇年代の波照間島と黒島のカツオ漁ネットワークについて考察すると共に、そのネットワークの地図を製作したい。さらに、なぜこのようなネットワークが成立しえたかについて若干の考察を述べたい。

(1) カツオ漁のネットワーク

石垣島は八重山のカツオ漁に関する情報・資本・資材・流通の中心地であった。波照間島でもカツオ漁に必要な資本や資材や情報は石垣に求めた。また、出来上がったカツオ節は石垣の間屋を通して日本全国に売られていった。

カツオ節製造では薪を毎日燃やす。波照間島にはカツオ節製造に使用できるほどの薪はない。薪は西表島から仕入れていた。薪を専門に扱う業者が西表島にはいたという。波照間島でカツオ漁の始まった頃は、カツオ船は石垣の間屋から内地の船を買ったともいうが、カツオ漁が盛んになると石垣にあった造船所に注文し、その材木は西表島から調達した。

波照間島ではカツオ漁のエサとなるザコを黒島の保里部落から買った。漁の期間をとおして契約をしたのである。黒島の人々の利用したザコのスは黒島と小浜島の間ヤナであった。黒島のザコトオーヤーは情報だけでなく、ザコ捕りの資材なども石垣から購入していた。

以上から、得能壽美『近世八重山の民衆生活史』に掲載された数々の通耕地図を做って、「波照間島と黒島のカツオ漁ネットワーク地図（昭和二〇～三〇年代）」を製作した。

ていた。

② “夏はカツオ漁、冬は農業” という半農半漁の生業システムが確立できていた。これはカツオ漁の組合と部落共同体がほとんど結びついていたため調節できたことである。

③ 八重山の中心である石垣島から遠いという位置的特徴。

波照間島は遠隔の地にあるため、石垣島にカセギにいけない、近隣の島々に物々交換や売買にもいけない。このような状況から、他の島よりも切実に自らの産業を持つ必要性があったと考えられる。他の島々に比べて、「中心の島」である石垣島に「遠い島」という波照間島の特徴がカツオ漁の興隆の理由のひとつとなった。

④ 昭和初期ではあるが、カツオ漁や農業以外にも燐鉱採掘によって島は潤っていたので、他の島よりもカツオ漁に対して資本投下が可能であったと考えられる。

戦後も波照間島ではカツオ漁が興隆したが、黒島（保里部落）ではカツオ漁ではなくザコ捕りが盛んになった。この違いは何に由来するのだろうか。

① 保里部落の人がザコ捕りに従事したのは、彼らがウミンチュであったこと、波照間島の漁船のザコ捕りが半農半漁の保里部落の農業暦に合っていたため。

② 黒島は石垣島に近いので、波照間島と比べてさまざまなカセギができた。そのため自分たちでカ

ツオ漁などの産業を興すより、ザコ捕りや外でのカセギのほうがてつとりばよかった。

③ 畑作のみの小さな島なのでカツオ漁を大規模に行う資本の蓄積が無かった。

④ 黒島の周囲にザコのいるリーフがあった。

八重山ではその島々の特徴を生かした生業が行われていた。それは決して米や雑穀栽培を主とするものではなくて、“時期、時期の農業”とさまざまに“カセギ”と言うモザイク模様の生業であった。そして、島はモザイク模様の生業を基盤として、島々のネットワークの中で依存しあいながら生計を立てていた。従来は「高い島」・「低い島」間のネットワークが主に取り上げられてきたが、本稿では、「中心となる島」の近くに位置する「近い島」と遠くに位置する「遠い島」のネットワークの存在を指摘し、そのあり方について若干の考察をした。自明のことであるが、この場合、ネットワークの「中心となる島」もまた重要な存在であることは忘れてはならない。

付記

本稿は比較民俗研究会（佐野賢治代表）主催の「二〇〇〇回記念研究会」（二〇〇九年 神奈川県）にて口頭発表した内容をもとにしたものである。

謝辞

波照間島の勝連文雄氏、崎山千代氏、大嵩安昇氏、黒島の宮良当成氏、宮良哲行氏みやもと、船道憲範氏をはじめ、お話を聞かせてくださった方々、調査の便宜をはかってくださった方々に心から感謝いたします。

また、資料を提供してくださった石垣市立八重山博物館に感謝いたします。本稿のエサ入れの籠の図は八重山博物館蔵の太田正議氏の絵「明治・大正時代のカツオ節製造工場で使用された器具など」に描かれた一部です。さらに、カツオ漁の資料について助言してくださった『沖縄文化研究』編集委員会の先生方に感謝いたします。

《参考文献》

- 安溪遊地編著 二〇〇七年 『西表島の農耕文化 海上の道の再発見』 法政大学出版社
- 石垣市史編集委員会 一九九四年 『石垣市史 各論編 民俗上』 石垣市
- 沖縄県農林水産行政史編集委員会 一九八三年 『沖縄県農林水産行政史 第十七巻 水産業資料編Ⅰ』 財団法人農林統計協会
- 法人農林統計協会
- 沖縄県農林水産行政史編集委員会 一九九〇年 『沖縄県農林水産行政史 第八・九巻』 財団法人農林統計協会

- 加屋本正一 一九七七年 『波照間島』私家版
- 小林 茂 二〇〇三年 『農耕・景観・災害―琉球列島の環境史―』第一書房
- 古谷野洋子 二〇一〇年 「波照間島の農耕文化」『比較民俗研究 二四』比較民俗研究会
- 竹富町史編集委員会 町史編集室 一九九四年 『竹富町史 第一巻資料編 新聞集成第一』竹富町役場
- 竹富町史編集委員会 町史編集室 二〇〇一年 『竹富町史 第一巻資料編 新聞集成第四』竹富町役場
- 通事孝作 二〇〇三年 「波照間島のカツオ漁」『情報やいま』(二〇〇三年五月号)
- 南山舎
- 得能壽美 二〇〇七年 『近世八重山の民衆生活史―石西礁湖をめぐる海と島々のネットワーク』榕樹書林
- 野原全勝 一九八二年 「波照間島の漁業」『波照間島調査報告書 地域研究シリーズ No.3』沖縄国際大学南島文化研究所
- 増田昭子 二〇〇七年 『雑穀を旅する―スローフードの原点―』吉川弘文館
- 宮良高弘 一九七二年 『波照間島民俗誌』木耳社

●資料

一九一三年

『宮古八重山郡漁業調査書』 法政大学沖繩文化研究所宝玲文庫

二〇一〇年

『やえやまナビ』 南山舎

【注】

(1) 与那国島は他の八重山の島々から遠く離れていて、「独立した島としての完結性を求められ、それに応じた生活形態を表現させていった」〔得能 二〇〇七 八〕ため、本稿で扱う石西礁湖のネットワークからは除外する。

(2) 通耕作とは集落や海を越えた地に田を持ち、仮小屋を作り通って耕作することである。

(3) 『やえやまナビ』(二〇一〇年)によると、石垣島・黒島間は一八・五キロメートル、石垣島・波照間島間は五三キロメートルである。

(4) 『宮古八重山郡漁業調査書』の原本はハワイ大学ハミルトン図書館に所属する。それを法政大学が複写したものである。私製、大正二年頃の作成と考えられる。

(5) 『沖繩毎日』(明治四三・八・二〇)によると、八重山におけるカツオ漁は「明治四〇年初夏糸満町の漁業者玉城徳の大和船を用ひて漁業をなしたるを濫觴とす」とあり、鳩間島附近に餌料となる諸雑魚の充分に成長するを認め漁船を回漕し営業を始めたという。

- (6) 「私が生まれる前からね、七〇年以上も昔じゃないかね。こちらの森はお宮（保里集落の御嶽のことであるう…筆者）ですけどね、こちらの森はカツオ漁のメイヤーっていったね、カツオ船があつてね、カツオ節つくりを盛大にやっていたらしいですよ。何年かあつたんでしょ。また、宮里のフキ村って昔あつたらしいんですよ。うちなんかの生まれる前。そのニシ側（北側か？…筆者）でカツオ船盛大にやっていたらしいですな。三、四艘くらいあつたんじゃないかな。黒島でもこつちでもやればあつちでも何艘があつた、そういう話ですよ」（宮良氏）
- (7) 明治四五年六月九日の「琉球新報」によると、同年六月四日に黒島漁業組合が登記されている。
- (8) 鳩間島のカツオ漁も盛んであつたが、同島のカツオ漁についての詳細は今後の課題である。
- (9) 「浜崎商会とか、南海商会とか、三島とか、マルオウ（漢字名不明…筆者）とかねいろんな力のある商人、あれ本土の人だよ、本土のカツオ漁に経験のある人」（勝連氏）
- (10) 「組合でカツオ船作らせて、わざわざ石垣の造船所に行って、親方と相談して。（石垣に造船所があつたんですか？）ああ、あつたや。何十隻という船作っていたよ」（大嵩氏）
- (11) 高村ゼミナールの報告書には「金武久吉さんのライフヒストリー波照間島最後のカツオ漁師」「底原壮善さんのライフヒストリー戦後、カツオ大漁船「豊福丸」の船頭として青年期を駆け抜ける」の報告がある。
- (12) 通事孝作「波照間島のカツオ漁」は『情報やいま』（二〇〇三年五月号）に掲載されたが、南山舎HPで見ることができぬ。

- (13) マリアは一九四六年頃沈静化し、一九五〇年にソテツ感謝祭が行われた。
- (14) 現在、波照間島ではモチキビも換金作物として栽培され、牧畜も多少行われている。
- (15) 一例として、「鯉漁業者に対する利子補給金交付規定」が一九六六年一月二一日に「鯉漁業者の健全なる経営を確保するため」に制定された〔沖縄県農林水産行政史編集委員会 一九八三 一六六〜一六七〕。
- (16) 「カツオ節よ、若い姉さんなんかが集まってきて削ってきれいにした。うち、姉さんなんか歌うたつてくれた思いもあるよ」(崎山氏) というが、カツオ節工場は若い娘たちの集まる場でもあった。
- (17) 「薪はそうとう使いますよ。石垣から大きい帆船、三本柱という船が来て、何十トン、何百トンかな、ああいう船が薪を満載して持ってくるんですよ。そのとき私たちはそれを陸揚げするんですよ。薪はカツオ船が操業しない前にちゃあんと買い入れて、乾燥させて溜めておくわけ」(勝連氏)
- (18) 「琉球新報」(大正六・一一・二二)によるとカツオ節の移出先は、鹿児島、大阪、神戸、東京、基隆であった。
- (19) 学費以外にも下宿代を含めて石垣島での生活費はかかった。
- (20) 黒島の粟納については、得能「近世八重山の人頭税制における粟納」(『近世八重山の民衆生活史』収録)に論じられている。
- (21) 黒島の豊年祭は毎年七月末から八月はじめに行われる。
- (22) イモ洗器はノミで大きな石を削って作られた。これにイモを入れて足で踏むと皮がこすれてイモはきれいになる。

- (23) 「西表の人と灰と米を換えたという話もあるけれどもついでにやったくらいじゃないかね。わざわざではなく。話にはきいてはおったけど、昔の人はやったかもしれないよ。けれど、灰っていうのはものものついででは……。粟はやった」(船道氏)
- (24) 小浜島でもゴマはできたが、米を作ったほうがよかつたからだという。
- (25) 黒島の粟酒製造と密売については、安溪遊地(前掲)と増田昭子『雑穀を旅する―スローフードの原点―』も言及している。
- (26) 「あの当時は一人前の人は一〇分、半分しかできない人は五分とって、みんなブージキ。だからね、この人は一人前、八分、七分、六分、三分とかみんな実力によってブージキするんだから。みんな儲けが違うさ」(宮良氏)
- (27) 子供たちはヤトウイングワ(雇い子)、あるいはコーイングワ(買った子)などと呼ばれた(石垣市史編集委員会 一九九四 六三六)。
- (28) 小浜島細崎くぼさきは糸満系漁民によって作られた集落である。『宮古八重山郡漁業調査書』(一三五・一三八)によると、クマ崎(細崎である)筆者を根拠地として操業していたカツオ船は糸満町(三艘)、勝連町(一艘)、沖縄県立水産学校(一艘)のカツオ船であった。
- (29) 「ザコ捕りは)うちなんかは二〇歳くらいからやったけど、うちなんかの親父の時代、もっと前からあいうのはあつたんじゃない。昔から漁船はやっているはずだからね。カツオ漁あつたころからやっていた。か

なり昔だよ」(宮良氏)

(30) 筆者は宮良氏にサバニで黒島の周辺を回っていただき、ザコの捕れたヤナを教えていただいた。海上には何の印もないが、島との位置関係からヤナの場合を判断するようだ。

(31) 「みんながみんなできるわけじゃないんだ。伊古もウミンチュだよ。あそこは糸満からの寄留民だからね。あそこもともとからのウミンチュではある。だけどザコ捕りはあそここの人はあまりやらなかった。こここの人がやっぱりこのザコのあるスわかっていたんでしょな」(宮良氏)

(32) 「昔の網は木綿網といって重いからね。これを軽くするためにはよ。豚の血や牛の血を持ってきて、網をあかしく染めて、蒸し器で蒸して、あれを干すわけさ。かたくして固まるから。水分を含まないから。軽いちゅうわけだ。木綿網の場合、そのままだったら重くて大変だから。二ヶ月に一回くらいこれを染めたんですよ。なるべく多く染めたほうが軽いからいいんだけど、血を買うのもなかなか、あんまり高くなかったんでしょが、いくらで買ってきたかはわからんねえ。親方が買ったの。あれは臭いよ、そのまま腐らすもんだからね」(宮良氏)